

ハウス

ハウスは実は最も基本的でありながら、一番重要なものです。ハウスの法則こそ、ジョーティッシュの驚異的中率を可能にします。

ハウス	象意
1室	自分自身、肉体(健康)、生まれた場所
2室	両親、両親からもらえるもの、財産、お金、口、食べること、日常生活の必需品、スピーチ、顔(目、鼻、口)
3室	弟妹、勇気、努力、メディア、パフォーマンス、手を使う仕事、職業訓練、低次の欲求(食欲、性欲、睡眠欲)、不倫
4室	家、土地、不動産、母親、故郷、アシュラム(宗教家)、農業、心、幸福、喜び
5室	子供、学習(セミナー、趣味)、教育、遊び、創造性、投資、弟子
6室	病気、敵、借金、労働、奉仕、自分が支配できる相手、お金を借りる能力、競争、ペット、部下、障害、対等でない自分より下の者、愛人
7室	外国(取引先)、配偶者、ビジネスパートナー(契約相手)、対等な相手、生殖器、精液
8室	寿命、陰謀、悪意、支配者、勝てない相手(天敵)、中断、変化、破産、遺産相続、贈与(父親からの)、パートナーのお金
9室	父親、教師(グル)、精神性、宗教、留学、海外旅行(巡礼)、高度な学問(大学、教授と出会う)、仕事を辞める、幸運、道徳的、法則
10室	父親(仕事上の)、上司(仕事上の)、注目を浴びる大舞台、オフィス、職場、高い地位
11室	兄、姉、友人、同僚、同好会、サークル、クラブ、会議、収入、利益、評価、受賞、飛びぬけて高い地位(勲章)、アフター5での付き合い
12室	出費、隠遁、入院、後ろから引っぱり出費をもたらす相手、献金、浪費、海外(隠遁地)、辺境の地、窓際、狭い場所(監禁)、秘密の不倫、性生活(ベッド上の喜び)、密室での私生活、人から見られない知られないプライベート、就寝前のくつろぎ

これらの象意について覚える必要はなく、代表的なものを覚えておいて後は、何らかのテキストで辞書的に引けばいいだけです。

帰納法と演繹法という学問上の方法論はご存知でしょうか？

ジョーティッシュというのは経験科学であり、最初はこれらの象意のいくつかを覚えたり、一般的なテキストに書いてあるハウスの象意を参考としますが、実際には日々、鑑定する中で、あるいは自分のチャートを調べる中で、ダシャーの支配星の絡みから、その日に支配的になるハウスの象意と、実際に起こった出来事の象意を比べてみたりして、ハウスの象意や解釈について理解していく手順が必要です。(帰納法)

これは個別的な事象(起こった出来事 = 象意)から普遍的な概念(ハウス)へと進むやり方です。

実際に自分や身の回りの人に起こった出来事がハウスの象意になります。

これはダシャーシステムの使い方に習熟した人であれば、ハウスの法則とダシャーを使って、起こった出来事から、ハウスや惑星の象意について研究することが可能です。

普通、ジョーティッシュを学習し始めた人は、ハウスや惑星の象意をテキストなどで見て覚えて、それがハウスの法則によって、ダシャーに現れているかを確認するのが通常の手順です。それが普遍(テキスト:ハウスの象意の解説)から特殊や個別(事象、出来事)に進むやり方です。(演繹法)

然し、本当は、個別から普遍に進むのが科学的方法論であり、実践の手続きなのです。

これは西洋でテキスト(聖書)を普遍とし、そこから全てを演繹するスコラ学が唯一の学問手法だったキリスト教支配の社会の中で、実験や観察を重視し個別的な事象から普遍的法則を導き出す帰納法を用いるイギリス経験論が生まれた歴史の中に現れています。

その方法論があったために西洋で合理主義、近代科学、資本主義が生まれたのです。だからこそ、21世紀のスーパーサイエンスであるジョーティッシュはこのような帰納法の手続きによることが推奨されます。K.N.RAO先生は、この科学的手続きに従って、既に占星術師たちには知られているパラシャラの古典などに書かれている知識を実際にその知識が機能しているかを、いちいち生徒が集めてきたサンプルを使って検証しているのです。だからこそ、彼はジョーティッシュを現代に蘇らせた、ジョーティッシュのルネサンスを開いた人物と言われるのです。

一方で、インドで伝統的にジョーティッシュを実践する家系に生まれ、幼い頃から、パラシャラや聖者の古典を暗唱する訓練をして、知識を丸暗記している占星術師たちもいます。

彼らは言わば聖典占星術師とも言えるでしょうか。確かにパラシャラのテキストは素晴らしいもので、それを暗記してしまえば、その膨大な知識によって、かなり多くのことが分かるに違いありません。

彼らはあまり科学的にジョーティッシュを研究しようという意欲が少ないようです。K.N.RAO氏が著書の中で書いていますが、このような人たちが、RAO氏に何故、聖典に書いてあることをわざわざ検証するのだと聞くそうです。RAO氏はパラシャラの古典は正しいかもしれないが、それを再現性のある科学的な知識とするには検証する必要がありますと語っています。この時、普遍的法則を個別的データで検証して正しいかどうかを検証していくのですが、科学的方法論において個別から普遍法則に至るには帰納的方法が必要となります。

聖典占星術師は、まずテキストに書いてあることを真理として前提として受け入れて、そこから、演繹的な手続きによって、予言をするのです。これは科学者ではなく、単なる信仰者です。

これはルネサンスが起こる前のキリスト教神学者が、聖書を哲学的に理解しようとした時に用いたスコラ学、スコラ哲学の方法論であり、まず、神とか普遍を前提としているという姿勢が見られます。

つまり信仰です。そしてスコラ学の手続きでは、まず最初に前提としたテキストと矛盾する事柄を見つけようとしていくので、個別具体を研究していく科学的態度ではなく、テキストを信仰していると言えます。聖典占星術師はテキストに書いてある知識を使って予言を行ないます。これは前提となるテキストが間違っていたら、結論が間違ってしまうという非常に非科学的な方法で、迷信的だとさえ言えます。全てをパラシャラに依存しているわけです。

然し、パラシャラのテキストは古い時代に書かれているため、現代に蘇らせるには現代の文化という個別具体的環境に則した新たな検証が必要なのです。それを怠る聖典占星術師は伝統に忠実な占星術師と言えますが、

科学的な占星術師とはいえません。

例えば、私は以前、聖典の知識を重要視していると思われるインド占星術師の鑑定で、金星期になったら、布を扱う仕事をすると言われました。当時私は、まだマハダシャーケートゥ期でしたが、金星の象意としておそらく、服装とかファッションとか、そうした華やかな象意を示したのかもしれませんが、それをもし布を扱う仕事というのであれば、現代の文化の文脈ではほとんど予言として力を発揮しません。その上、私は既にマハダシャー金星期になりましたが、現時点で布を扱う仕事はしていません。然し、ケートゥ期よりも服装は良いものを着ているかもしれません。金星期の華やかさとして派手になったとは言えます。(秀吉)

そして、これは今現在、春分点が魚座から、水瓶座に移行している時期に起こっている二つの方法論の違いなのです。つまり、魚座の支配星は木星ですが、木星が強い占星術師は、聖典の知識を丸暗記して、その豊富な知識を使って、予言を行ないます。その結果が当たっているかなどはあまり気にしません。そして、地道に知識が妥当に機能しているかを検証もしません。ただ聖典(テキスト)をインド5000年のヴェーダの叡智として、信じています。そして、伝統に忠実な人柄から、グルから愛される占星術師で割りと、人にはよいことを言って励ましたり、細かいことにはこだわらないおおらかさがある占星術師と言えるかもしれません。彼らはその予言の細部まで、厳密に当たろうと当たるまいと、人当たりがよく成功できる占星術師です。

一方、K.N.RAO先生を初めとする占星術師は、日々、パラシャラのテキストが本当に当たっているか、批判的に検証し、個別的な事例を使って、普遍(テキスト)の妥当性を常にチェックしています。そして、パラシャラのテキストを尊敬しつつも、実際に、出来事の観察と、検証で得られた知識を尊重する姿勢です。だからこそ、K.N.RAO先生からジョーティッシュを教わる人は、皆、数学やコンピュータ科学について得意な人が、あるいは得意でなくても、ある程度使いこなす人が多いようです。

中には、ソフトを自分でプログラムしてしまう人もいますが、非常に、実践的で、検証好きな人が多いようです。これこそが、古い時代の占星術師と新しい時代の占星術師の違いです。自分で科学的に検証してテキストを常に新しく更新していける人が新しい時代の科学的な方法論を身に付けた占星術師です。

帰納法を使って科学的に検証する占星術師は水星が、土星(制度、組織)やケートゥ(数学、プログラミング)と接合している占星術師です。水星が強く、そこに土星やケートゥ、そして太陽(論理、数学)などの影響が見られる占星術師ではないかと思います。

Ra			
	Sri K.N.RAO D/1		Ju
Sa		As Mo Ve Ma	Su Me Ke

	As Ke	Ma	
Ju	D/9		Me
			Su
	Ve Sa	Ra Mo	

K.N.RAO先生は、水星が乙女座で高揚し、ケートゥと接合し、土星のアスペクトを受け、数学や論理を表す太陽と接合しています。水星は9室の支配星でアスペクトする土星は5室の支配星であり、ダルマハウスの5室と

9室が絡んでいます。つまり、K.N.RAO先生の検証による科学的、実証的な業績はこの12室に在住する水星、ケートゥ、太陽、そして、それにアスペクトする土星から来ているのです。

然し、だからといって、パラシャラのテキストなど古典の知識をないがしろにするのでもなく、それらを尊重し、あくまでも検証によってその知識を裏付けるという立場です。これは強い木星も一役買っています。然し、木星は3、6室支配であるため、やはり、それらの伝統を一筋縄で素直に受け入れるというスタンスではありません。尊敬しつつも批判的に捉えています。これがおそらく機能的凶星化した木星が強い配置にあることの意味ではないかと思えます。

従って、かなり脱線しましたが、これらの象意は丸暗記するものではありません。むしろ、これらの象意は必要なものを最低限覚えておき、後は、自分の経験の中で発見していくプロセスが必要です。

古典に書いてあるたくさんのヨーガを全て丸暗記しても何にもなりません。むしろ、そのような労力にエネルギーを投入するあまり、実際の自然(この場合は惑星配置であり、クライアントを指す)を相手にして発見していく新鮮な驚きや喜びを失ってしまうでしょう。

ですから、暗記などの機械的な作業は極力控えめにし、発見していくプロセスが必要です。

然し、逆説的な言い方ですが、早くそうした発見のプロセスに進むために最初に惑星の象意やハウスの象意をある程度、覚えておき、研究する中で、いろいろ引き出すことの出来る知識の蓄積も役に立ちます。ですから、覚えることは本質的なことではないということをまず理解しておいて、その上で、惑星の象意はしっかりと覚えることを勧めます。